

2022年12月

当月の氷壺集・氷室集より尾池葉子抄出

氷 筈 集

空爆の怯え今だに八月来	佐々木 成
返信のけふは来ぬらし虫集く	朝田 玲子
砧打つひそひそ声の消えし闇	河村 純子
瓢箪のそぞろ容をきめるころ	仁田 浩
嵐電の警笛軽し秋麗ら	森 壹風
オリーブの実は紫にヴィヴァルディ	鴻坂 佳子
気まぐれに鳴く鈴虫や小雨の夜	片山 旭星
化学の本膝に始発や朝寒し	碓氷 芳雄
秋やいま笠雲となり笠ヶ岳	丹羽 康夫
遠のきてゆくバグパイプ花野道	西五辻芳子
秋空へ古墳の丘の広がれる	栗本 一代
青空へ風をいなして秋桜	石原ゆき子
天高し飛べぬキウイは空知らず	植田 清子
生還の夫へ月見の声かけて	大野千鶴子
秋霖や学徒に逝きし友の兄	加藤かず子
山頂や駅長の推す大花野	川上 和昭
駅出かねる人の増え稲光	城戸崎雅崇

手が探すめがねいづこぞ今朝の秋	友永基美子
名月や雨戸を早くしめ過ぎて	村木 道子
いつときは刈る手の止まり草の花	森 幸子
火の山の噴気横切る秋の雲	福 のり子
川床閉づ夜更け仕事も終ひなる	鳥居 裕子
暗闇の深さ増したる鉦叩	齋藤 亜矢
長椅子に日射し逃げたり小鳥来る	陶 慧慈
蒟蒻掘る天明の火山灰土に	森川恵美子
音を頼りに彷徨ひ歩く風の盆	大野 晶子
秋風や海王星に輪の見えて	斎藤よし子
捧げ銃せしあの教練敗戦日	中村 順次
秋の日のピザ窯煙立ちのぼり	原田久仁一
秋麗やりすの訪ねてくる芝生	小堀 恭子
田仕事の手の止まりけり秋の虹	山口 容子
氷水のボトルの軽し鶴林寺	田中 逍遙
柿渋や渋紙裂くに指ざはり	山中伊蘭子
琥珀糖柚子に秋日のティータイム	山本 京子
毬踏めば栗の実の飛び山の道	小川 妙子

禿筆の願ひの硯洗ひけり
一瞬の釣瓶落しに月の影

玉元 庄弘
津嘉山 典

2022年11月

当月の氷壺集・氷室集より尾池葉子抄出
氷 筍 集

もごもごと真言捧げ施餓鬼かな	森 壹風
物売の声の途切れて日向水	牧田満知子
蛇一闪鳥一斉に飛び立ちぬ	鴻坂 佳子
打水や豆腐屋の午後長きとも	河村 純子
ひぐらしの一声のあり夜明前	片山 旭星
回船問屋名残の土蔵昼の虫	佐々木 成
脹脛の弾痕見する敗戦日	中井 昭雄
舟縁に順々並び鶉の休む	荒木 昭代
日の落ちてなほ時惜しむ蟬時雨	植田 清子
浅草の遠くなりたり泥鱈鍋	加藤かず子
亀多き弁天池ぞ夏の雨	城戸崎雅崇
花合歓や和束の里へ尾根づたひ	栗本 一代
かなかなのかなかなかなと暮れはじむ	友永基美子
父の遺影疾うに年下瓜の馬	仁田 浩
流れゆく雲に色見せ盆の月	齋藤 亜矢
送火の消えて弾ける屋根の雨	大辻 都
秋澄むと本音を言へば寂しくて	川内 一浩

古漬をのせ水飯や祖母の昼	鳥居 裕子
朝露に揺るる花なり甘野老	福 のり子
岩窟へ晩夏の潮の押し寄する	福江ちえり
新涼や志摩の浜にて靴に砂	谷口 文子
立ち尽くす影じりじりと原爆忌	小堀 尚美
夕立や濡れて帰らうなどと決め	石原ゆき子
縛られぬことの気楽さ秋簾	小堀 恭子
十噸の氷の冷氣氷室開く	西五辻芳子
秋近し二語文となる二歳の児	森川恵美子
従兄二人兵の墓なり終戦日	中村 順次
夏服や三角筋の盛り上り	吉田 達哉
ブルーベリー旬の夏なり買ひ急ぐ	松澤 博子
声の澄む青松虫の庭となり	田辺美千代
かなかなに梵鐘なじむ日暮かな	前田 鈴子
鍋の穴ふさぐ父ゐし敗戦日	森 幸子

萍の湖面をすべる丸木舟	山口 容子
青空の紅差すあたり百日紅	国兼 弓華
手に持てば米搗虫のびしと搗き	奥野 千秋
聖霊とふ文字の木彫や天高し	玉元 庄弘
風鈴に風のかたちを聞きにけり	津嘉山 典

2022年10月

当月の氷壺集・氷室集より尾池葉子抄出

氷 筍 集

寒霞溪なれど夏なる霞かな	富沢 壽勇
祇園会や襷掛けして会所の子	中島 冬子
段ボール大暑もろとも縛り上ぐ	朝田 玲子
鮑とる素潜の間の長さとも	中井 昭雄
独りごつ風待月の文机	森 壹風
蛸の鳴く森昏し雨上り	石原ゆき子
手枕母の昼寝や笹の風	植田 清子
厨とて不揃ひなれど青簾	川上 和昭
風鈴の音色に遊ぶ夕座敷	栗本 一代
揚羽来たぞと呼びくるる夫は逝き	友永基美子
波音のやうやう遠き昼寝かな	福 のり子
果たされぬ約束いくつ夏の星	川内 一浩
迷ひなく道迷ひたる天道虫	齋藤 亜矢
何となうつられて笑ふ涼み床	鳥居 裕子
小路へと祇園囃子の戻り笛	竹中 一花
鉾粽今晚かざりと子の唄ふ	細見 昌代
医王嶺の散居にそびゆ夏霞	福江ちえり

夏山の靴に任せて歩き抜く	浅利 美鈴
臥す母に声をかけつつ草むしり	大野 邦夫
船上の手旗信号五月晴	佐藤 聡
夕立や大き葉笠に子の走る	櫛淵かりな
片隅より香煙流れ夏座敷	森川恵美子
草ぼうぼう目を癒さるるとき涼し	大野 晶子
縁日や寺の息子の白緋	斎藤よし子
父の日やかつては企業戦士たり	中村 順次
菜作りや蚯蚓蛞蝓友として	森 裕子
虫干の国宝の軸所定位置	松澤 博子
潮の香を放つ少年日焼けして	小堀 恭子
蓮の蕾洗ひ出荷の蓮の里	小堀 尚美

玉虫よ太子の世など彷彿と	田辺美千代
稚魚の育つ田の面渡るよ青田波	山口 容子
ひぐらしのこゑ遠くより午前四時	山田ミチ子
発熱や窓いつぱいの雲の峰	大辻 都
干拓の時の蓮咲く庭の壺	藤本 隆子
こごせと呼ぶ金剛山や山清水	奥野 千秋
昔より西瓜冷しに釣瓶井戸	田中ミヨ子
泉湧く古城や地下の岩の間に	玉元 庄弘

2022年9月

当月の氷壺集・氷室集より尾池葉子抄出

氷 筍 集

古文書は候あまた南風	仁田 浩
薫風や羽ばたき見するこふのとり	朝田 玲子
梅雨寒や愛宕の瘤のくつきりと	中井 昭雄
青田なか行くや短き葬の列	佐々木 成
茶葉かじるを慣ひとしたり新茶汲む	中島 冬子
少年に還る休みの夏帽子	森 壹風
水菓子の雛豆餡夏手前	丹羽 康夫
お念仏いかほど聴きし沙羅の花	片山 旭星
銀巴里のありし通りを夏帽子	鴻坂 佳子
珍客の半裂原爆ドーム横	田中 勝
緑蔭にこころ預けし昼下り	宮原亜砂美
馴鮓の秋刀魚ほどよき酸味なり	西五辻芳子
向日葵のおほかた健康優良児	前田 鈴子
緑蔭や若き社員の握り飯	植田 清子
燕もう巣へは戻らずアーケード	加藤かず子
炎吐く大道芸や夏きざす	城戸崎雅崇
語り部の最後の学徒慰霊の日	福地 義雄
流れ下る分水嶺や虎が雨	碓氷 芳雄
刻至り亡者出で来る薪能	河村 純子
振り向けば続く足跡夏の海	川内 一浩
葛切や祇園言葉の行き交うて	谷口 文子
「養老」を父の背と観る薪能	牧田満知子
桜えび干す一面の薫むしろ	中村 順次
巻貝のジュラ紀の層や青時雨	竹中 一花
息災と言ひ訳にして昼寝かな	森 幸子
夏空や海に浮くごと利尻富士	山口 容子
連山の雲の湧き立つ早梅雨	福江ちえり

船上の手旗信号五月晴	佐藤 聡
晶子忌や夫の理想と妻の夢	坂 利美
黒南風や停泊中の貨物船	大野 邦夫
優れもの一つ残して柿の花	田辺美千代
軽鳧の子の一羽が見えぬこのところ	荒木 昭代
プールにて潜れば音の消えてをり	國兼 弓華
祇園会の粽作りに爪青く	細見 昌代
六月や気根溢るるガラス瓶	山本 京子
梅雨寒や狐のみたる屋根の上	小川 妙子
母の杖に温もり遺る夏の朝	玉元 庄弘

2022年08月

当月の水壺集・氷室集より尾池葉子抄出

氷 筍 集

菖蒲湯の菖蒲ゆらりと朝の風	小 寫 和
間食に新茶一服茶の工場	中 島 冬子
夏立つや巫女は緋色の風まとひ	牧田満知子
熾入れの焙炉や新茶四キロを	丹羽 康夫
目高五匹きらきらと連れ帰る	西五辻芳子
そよ風に腰くねらせて鯉のぼり	石原のり子
珈琲の一段と濃く迎へ梅雨	大石 高典
雑草の石割るちから夏に入る	植田 清子
囀りに囀り答へ竹の径	大野千鶴子
原爆を知る吾が願ひ聖母月	友永基美子
半世紀基地は変はず復帰の日	福地 義雄
覚えなき母の温みや茄子の花	前田 鈴子
燕とび人は群なしアーケード	仁田 浩
露剥きし香り今宵の肴とす	朝田 玲子
夏の海ひとり歩けば知らぬ町	川内 一浩
麦青むだだつ広さを走り抜け	浅利 美鈴
老鶯や昔は谷へ水汲みに	奥野 千秋
列あれば並びたくなる卯月かな	陶 慧慈
水田の闇の深さや夜鷹啼く	福江ちえり
ほんのりと母の香のある扇子かな	大野 邦夫
太平洋へ曲り下りや蟻の道	福 のり子
流鏝馬の鞍の手入れや神事前	谷口 文子
青竹を割り器とす洗鯉	鳥居 裕子
白に白重ねて眩し更衣	碓氷 芳雄
夏めくや日差しに白きグラウンド	片山 旭星

溪流に釣糸光る若葉かな	佐藤 聡
慰めはいらぬ藤房揺るる日は	竹中 一花
さやさやと風に呟く新樹かな	田中 勝
三千年清水湧き出づ遺跡村	櫛淵かりな
暮れかかる道やしらじら山法師	城戸崎雅崇
鷹巢立つオホーツク海波高し	中村 順次
苗箱を渡すに父と子の氣息	山口 容子
秘仏見しその目に若葉仰ぎけり	塚本 郁子
けんけんとう鳴くが見えずよ新樹光	坂元百合子
九十二吾に端午の節句かな	長瀬 朋孝
ハンカチを差し出す涙ぐむ人へ	田崎セイ子
薫風や筆走る音弾みたり	津嘉山 典

2022年07月

当月の氷壺集・氷室集より尾池葉子抄出

氷 筍 集

影のみの揺るる御苑の糸桜	小 嶋 和
ものの芽や文房具屋の品揃へ	朝田 玲子
猫の子の柱に傷の背くらべ	碓氷 芳雄
大戸開け祖母の待ちゐる初燕	佐々木 成
陽炎や山のふもとの古戦場	片山 旭星
清明や濁音のなき鳥の声	森 壹風
俊寛の愛でし谷かや桜散る	中井 昭雄
茎立や腓骨の罫は自然治癒	仁田 浩
店の戸は開けておけよと初つばめ	川上 和昭
竜天に登る気魂の筆のあと	西五辻芳子
夜更けては深呼吸せる桜かな	石原ゆき子
花冷や戦禍の絶えぬ人の世ぞ	植田 清子
戦禍忘れぬ八十半ば桜散る	加藤かず子
魚の影忙しく走り鳥帰る	友永基美子
骨折の指もてあます遅日かな	村木 道子
ミサ齊唱「いのちの歌」や鳥雲に	富沢 壽勇
ぬひくるみ椅子に座らせ春灯	川内 一浩
桜咲く夜行列車の北進に	福 のり子
不揃ひの籠に盛り上げ染卵	福江ちえり
風に乗り風となりたりしやぼん玉	大野 邦夫
白蝶の来て去りて来て友逝きぬ	前田 鈴子
雲雀の巣移しシニアのサッカー場	鴻坂 佳子
風光る木遣の唄の朗々と	櫛田かりな

奈良なれやホテルの朝に蕨餅	田中 勝
亀またも首を伸ばすよ藤の花	城戸崎雅崇
波しぶく能登の海岸春の風	松澤 博子
橋膨れ崩れ落ちたり蜃気楼	坂 利美
囀りや夢の続きのやうに聞き	小堀 恭子
さざえ焼く磯の香りの泡立ちて	小堀 尚美
小流れの石につまづく花筏	田辺美千代
アルバムを作る職とて啄木忌	森 幸子
字寄りそふごと一人静の花の数	山口 容子
留守番や巣組の鳥を友となし	奥野 千秋
橋渡るたび海近し風薫る	青井 律子
病室より見渡す畠の穀雨かな	長瀬 朋孝
ウクライナの平和祈るや春落葉	玉元 庄弘
ふらここや風切るこち鳥のごと	津嘉山 典

2022年06月

当月の氷壺集・氷室集より尾池葉子抄出

氷 筈 集

ぼんぼりの明り丸うに春障子	朝田 玲子
木瓜の花ひと鉢ぽつと本能寺	森 壹風
残雪の風吹き抜くる廃牛舎	佐々木 成
霞みたる朝の街出る旅に出る	小嶋 和
春の日や石膏接ぎの出土品	仁田 浩
白雲や故郷は伊予の遍路道	片山 旭星
玉砂利に吸ひ込まれゆく蝶の影	谷口 文子
教習車遠慮がちなり花吹雪	丹羽 康夫
菜の花へサイクリングの列消ゆる	川上 和昭
啓蟄や蟲の顔して土均す	長瀬 朋孝
隊列を組みしづかなり鳥帰る	植田 清子
雛の前四角に座る男の子	大野千鶴子
谷川の流れ豊かに山笑ふ	加藤かず子
里帰りの子の欠伸日の永し	田崎セイ子
蛤の音立てて開く潮汁	立石 律子
マリア様とふ名の椿紅差して	友永基美子
名山と呼ぶる山や風光る	野木 正博

生計とて籠一杯の蓬摘む	森 幸子
礼堂に火の粉爆ぜたりお松明	西五辻芳子
戦場の子らに日本の風届く	山本 京子

漆黒の海漂ふよ朧月	津嘉山 典
けん玉のこつんと填る春休	細見 昌代
万葉の和歌の謎解く春の夢	森川恵美子
カステラに焼け目の蜜や春の風邪	坂 利美
燈籠を根方に抱き椿咲く	福江ちえり
キャンバスを黒に染め上げ春愁ひ	林 清恭
居酒屋の跡地花壇にチューリップ	吉田 達哉
あらがひしことを手紙に卒業す	小堀 恭子
白鳥は羽毛一片残し去る	山口 容子
鳶の滑空その青空に畑おこし	山田ミチ子
仏間へと春日こぼるる花頭窓	奥野 千秋
火の散華風を捕へてお松明	松村 滋子
裏通り歩くが好きよ京の春	小川 妙子
討議いづれも決まらずにみる春の雨	石田 祥子
地図に名のなきうさぎ島春の雨	坂元百合子
鴨走るとき首の揺れ尻の揺れ	田中ミヨ子
膝当てに土のぬくもり種を蒔く	玉元 庄弘

2022年05月

当月の氷壺集・氷室集より尾池葉子抄出
氷 筍 集

空と海ばうばくとして白魚汲	朝田 玲子
鼻の絶えて寂ぶるよ村社	佐々木 成
展覧会折り返しどき二月尽	小寫 和
庭石へ虫が身を寄せ春疾風	碓氷 芳雄
肩車の小さき仮面よ謝肉祭	鴻坂 佳子
涅槃図に息のやうなる音のあり	仁田 浩
遊戯の児の相の手めきし初音かな	森 壹風
当て無くも夕日浴び行く名残雪	石原ゆき子
風切れば耳切れさうな余寒かな	谷口 文子
寒林へちぎれ雲疾し宿遠し	荒木 昭代
話弾み初稽古の始まらず	植田 清子
掌にのせ独楽習ふ日暮まで	大野千鶴子
北国の除雪の労を思ひやり	加藤かず子
土佐よりの土の匂ひや露の臺	栗本 一代
雪止むや午後の予定の動き出す	田崎セイ子
雪降ると海苔一振りの酸辣湯	陶 慧慈
突然に一点睨み狐の犬	鳥居 裕子

掻き上ぐる名残の雪の重さかな	福江ちえり
上昇の機外を撮し雪の果	田中 勝
夜空より生まれて来たり春の雪	片山 旭星
少年の釣竿春の溪を釣る	竹中 一花
弾みごころ華やぐ軽さ春ショール	山本 京子
轉りや碎石場の休業日	大野 邦夫
出展の上野へ急ぐ春コート	林 清恭
朔日の神棚飾る二月かな	森川恵美子
コンパスに方位確かめ恵方道	城戸崎雅崇
帰港せる喫水深き若布刈舟	中村 順次
春光や並足にゆく駒の音	谷 晃
大茶園ファン一斉に霜の朝	原田久仁一
漕ぎながら体調測る春の朝	吉田 達哉
雛飾る官女真似る三姉妹	小堀 尚美
春待つや主治医の前に背を伸ばし	前田 鈴子
生涯の働きぐせや土蛙	森 幸子
綾取や勝手に動く婆のゆび	山田ミチ子
百年の土間にこもれる余寒かな	奥野 千秋
闘志見せ少年投手豆を撒く	小川 妙子
可惜夜を漫ろ歩きに桜かな	津嘉山 典

2022年04月

当月の氷壺集・氷室集より尾池葉子抄出

氷 筈 集

砕け飛ぶ氷柱や朝日乱反射	碓氷 芳雄
綿入の祖母の縫目の今にして	朝田 玲子
餅花や小さき葉の芽の見えて来し	小鳥 和
御祭殿の四つ重なる鏡餅	中井 昭雄
真正面は雪の比叡や初御空	中島 冬子
すれちがふ人の呟く寒さかな	佐々木 成
凍滝の無音の空の深さかな	鴻坂 佳子
朝日差す賀茂の社に謡初	河村 純子
神と医者と信じようとぞ初神籤	川上 和昭
厳寒の廊小走りの僧若き	加藤かず子
寒鴉一羽がよろし枝の上	城戸崎雅崇
片腕は長き枝なり雪だるま	立石 律子
数へ日や残る仕事を日割にし	田中ミヨ子
冬日向十指広げて空へ向け	友永基美子
寒に入る術後や麻酔醒め難く	長瀬 朋孝



甘蔗刈の支度ととのへ人手待つ
糰煮餅小さく切りて夫のため

福地 義雄
藤本 隆子

雪かきのせめて門まで二度三度
年酒の小瓶に足るよ子の世代
卓上に苗育ちをる春隣
雪代の碧さ逆巻き落ちゆけり
襦袢着て学生寮の句会かな
人恋しきポケットの手よ息白し
花びら餅完売とあり虎屋なり
巢の主いづこそ高き枯木立
体温を測ることより初仕事
冬苺あるに手付かず獣道
寒の夜や音立て落つるブレーカー
ランドセル売場広げて二月来ぬ
待春や貨物列車の最後尾
軒端への一步気を張る雪下し
正月や父まかなひの祝ひ膳
初鏡夫あるかぎり紅差して
晴れたりと雪掻きに出る老い二人
降る雪に見とれて鍋を焦しけり
数歩ごと持ち重りする冬菜買ひ
二上山に睡る皇子や虎落笛

村木 道子
森 幸子
陶 慧慈
福江ちえり
大石 高典
浅利 美鈴
宮原亜佐美
福 のり子
谷口 文子
奥野 千秋
斎藤よし子
中村 順次
吉田 達哉
大野 邦夫
田辺美千代
前田 鈴子
山口 容子
石原ゆき子
小川 豊子
松村 滋子

2022年03月

当月の氷壺集・氷室集より尾池葉子抄出
氷 筈 集

鯛焼の重さに湯気の重さかな
団居るに休符打つごと冬の雷
冬の夜や針の止まりし置時計
鐘楼の手綱曳くとき息白し
寒がりの男子角巻育ちなり
新しき草履たたきに一葉忌
初荷とて福袋解くさて何ぞ
紙漉の作業場見やり色紙選る
宇治川の疾き瀬音に山眠る
帆船の眠る波止場や星月夜
鳴き声の棲み分けてゐる冬の鳥
年毎に太字となりし賀状書く

仁田 浩
朝田 玲子
片山 旭星
中井 昭雄
中島 冬子
河村 純子
西五辻芳子
鴻坂 佳子
荒木 昭代
植田 清子
城戸崎雅崇
立石 律子



野仏に供へし柿の熟しをり	田中ミヨ子
貫花の舞あでやかや冬ぬくし	知念 幸子
松手入すみし庭師に空広き	村木 道子
鮎をひた待つ漁の番屋の灯	佐々木 成
初晴の稲村ヶ崎よりの富士	小畠 和

玉泡や醜鍛へる冬の水	森 壹風
むささびの一声に森しづもりぬ	鳥居 裕子
鴨鍋の尽き語らひの尽きずをり	浅利 美鈴
着ぶくれや九十九島の影揺らぐ	谷口 文子
立冬に漬け立冬へ祖母の味	陶 慧慈
踏み入りぬ落葉の深さやはらかさ	福 のり子
粉雪やかんざし光る舞妓ゐて	佐藤 慎一
気嵐や海に向かうの劔岳	野木 正博
翼果つる兵士の海や寒椿	牧田満知子
電線も命の糸よ冬夕焼	櫛淵かりな
あたたかき涙のありて年の暮	斎藤よし子
噴煙のごと吹き上ぐる富士の雪	丹羽 康夫
吹き織す炭団焔めく忌日かな	福江ちえり
十に八九を棄てしとや蜜柑山	坂 利美
おはやうの声のつくりし白き息	大野 邦夫
しののめの谷川ひびく臘八会	小堀 恭子
黒豆の脱穀終り田は雪に	山口 容子
九十二の齡全う年惜しむ	長瀬 朋孝
冬の夜や姉困らせる留守居の児	田崎セイ子
朝ごはんよと呼ばれたし寒卵	玉元 庄弘

2022年02月

当月の氷壺集・氷室集より尾池葉子抄出

氷 筍 集

冬晴やかつての町の雑木林	小畠 和
走り根のここにありしか落葉搔	朝田 玲子
勢子の放つ角伐りをへし鹿いづこ	西五辻芳子
花野原坐ればここが居場所なり	河村 純子
川波の寄るたび葦の枯れ騒ぐ	佐々木 成
枯蟻螂何用ありて辞書の上	鴻坂 佳子
南座のまねき仰ぐに初時雨	中井 昭雄
枯蟻螂身を尖らせて轍道	牧田満知子
湯豆腐の湯気ほふほふと笑ひ皺	碓氷 芳雄
客来ればかしら被りて獅子の舞ふ	青井 律子

サックスの流るる河原秋深し	植田 清子
小魚を啜へて浮びくる小鴨	城戸崎雅崇
病棟の人に厳しき冬の雷	長瀬 朋孝
透きとほる逸品若狭干鰯	前田 鈴子
化け狐出しとふ崎の枯尾花	森 幸子
神無月修復急かる大鳥居	仁田 浩
氏神の戻りを祝ふ神楽月	森 壹風

忽然と子の丸刈りぞ鎌鼬	富沢 壽勇
山凍つや駆除とふ文字の獣道	鳥居 裕子
五湖の波立つざわめきの冬来る	田辺美千代
絵巻めく大いなるさま冬の月	田中 勝
紅葉狩のち渋滞の中京へ	石原ゆき子
教会堂にチェロの音のあり冬の庭	櫛淵かりな
バス迂回する華やぎに酉の市	斎藤よし子
爛酒をいのちの水と言ふ父と	大野 邦夫
冬の日でするりと翳る苔の庭	小堀 恭子
冬風や岬の浜の干し魚	小堀 尚美
恐竜のしつぽに添へ木冬支度	山口 容子
家事こなす母に勤労感謝の日	浅利 美鈴
柿食うて種植ゑてみむ蟹の真似	荒木 昭代
髭白き宮司留守居よ神の旅	大野千鶴子
月蝕の牙ゆ咆哮のオートバイ	國兼 弓華
カタログのあり余るほど年用意	藤本 隆子
日の向きに風を呼び込む吊し柿	松村 滋子
飛ぶ鳥のいつしか変はり冬支度	塚本 郁子
長堤へ軽石寄する冬の波	志多伯節子
耳立てて秋の音聞くうさぎかな	玉元 庄弘

2022年1月

当月の氷壺集・氷室集より尾池葉子抄出

氷 筈 集

自然薯の土の寝床よ時を待つ	富沢 壽勇
七節虫よジャコメッティの男めく	中島 冬子
長き夜のジェームズ・ボンド最終版	鈴木 春菜
秋裕いま足元は松葉杖	河村 純子
月ほのと行き交ふ瀬戸の舟の影	碓氷 芳雄
廃銀山つらぬく川の水澄めり	佐々木 成
薄明や搾り出さるる新豆腐	中井 昭雄
ランドセル放り刈田に遊びけり	片山 旭星



落人の里の渋柿猿なかし
どの店も列新蕎麦の深大寺
渡り来し群に金黒羽白をり
復興いまだ首里城の小春空
余命など悩むなかれと源義忌
とりどりの帽子の動く花野かな
豆殻にのこる豆爆ぜ夕支度
木犀の忍び入る夜気仮の宿
母強し南瓜切るとき爪立ちて

青井 律子
城戸崎雅崇
栗本 一代
志多伯節子
友永基美子
本多 智恵
前田 鈴子
朝田 玲子
鳥居 裕子

吾亦紅胸にしもうておくことも
秋晴や魚くはへて白い鳥
秋麗ら今日を最後の献血日
長じたる子を案ずるにそぞろ寒
朝顔や風に流されブーメラン
阿蘇噴火に友を気づかひ秋寒し
昼さかな鴉の止まる古案山子
原生林に風穴を抱き秋の富士
屋上を修理する影冬隣
柿に色加へて里の陽のゆるび
顔よりも大き諸なり子の掲ぐ
月白や音読遠く聞え来る
大原より届けられたる名残茄子
虫ごとに籠かへてをる男の子
拍子木のくわんくわんと星月夜
朝日さす初冠雪の八ヶ岳
病室の窓に親しむ紅葉かな
山里を歩きませうよ秋うらら
瓜坊に獣と忘れゐる仕草
眠られぬ夜を恵みとす虫時雨

山本 京子
田中 勝
石原ゆき子
小堀 尚美
櫛淵かりな
森川恵美子
佐藤 聡
中村 順次
坂 利美
森 幸子
山口 容子
山田ミチ子
大野千鶴子
藤本 隆子
細見 昌代
松村 滋子
長瀬 朋孝
小川 妙子
田崎セイ子
玉元庄弘